



サトウくんの
特別な一日

川路 新吉

サトウくんの特別な一日

その日は朝からおかしかった。

学校に行く途中、少し先にクラスメイトのスズキさんが歩いているのに気づいた。

あいさつしようと近づくと、後ろからではわからなかったのだけど、小さなスズキさんには似合わない、とても大きな箱を抱えていた。背中にしょっているランドセルよりも大きい。

スズキさんはとても真剣な表情で歩いている。そうとうあの箱は重いみたいだ。

大丈夫かな。

急いでかけよる。

「おはよう、スズキさん」

「おはよう」

重いだろうに、スズキさんは、はつらつとしたあいさつを返してきた。

しかし振り向いて、そこにぼくの顔があることに気づくと、スズキさんは一瞬すごく困った顔をした。

「手伝おうか？」

そして、ぼくが箱を持つようになると今後はあからさまに迷惑そうな顔をした。

「サトウ君ありがとう。でも大丈夫。さわらないで」

そうは言うけれど、大きな箱は今にも手から落ちてしまいそうだ。

「でも、すごく重そうだよ」

「うん。でも大丈夫だから」

どうしたんだろう。けっこう重そうな荷物なのに。ぼくがさわろうとすると怒り出してしまおう。

「どうしたの？スズキさん変だよ」

「大丈夫だから。早く行かないと、学校に遅れるよ」

スズキさんこそ、そのペースでは遅れてしまうよと思ったが、じっとぼくをにらむその目は真剣で、しょうがなく、ぼくは学校にむかった。

お昼休み、校庭でひとしきり遊んで、すこし早めに教室に戻ろうとしていると、視聴覚室の前をとおりがかったとき、中で学級委員のヨシダくんが何かをしているのが目に入った。

「何してるの？ヨシダくん」

部屋に入って声をかけると、ヨシダくんはびくりとした。そしておそるおそる振り向いた。

ヨシダくんのそばにはなにやら荷物がたくさんある。視聴覚室で何かやる予定でもあるのだろう。それにしてもたった一人で準備なんてなんて大変だ。

「何かの準備？手伝おうか？」

「いや大丈夫。ひとりでできるから」

ヨシダくんはそう言って、手に持っていたものをあわてて近くにあった箱にもどした。まるで

隠すように。

「でも、こんなにたくさんの荷物、一人じゃ大変だよ」

それでも手伝おうと思って荷物に近づくと、ヨシダくんはあわててぼくの肩を両手でがちっとつかみ、そのまま入り口のドアのほうまで押しやった。

「手伝わなくていいって言ってるじゃないか、早く教室にもどりなよ」

ヨシダくんがつかんだぼくの肩は、指が食い込んで少し痛かった。

「タナカ先生」

職員室でタナカ先生はパソコンでなにか仕事をしているところだった。

「どうしたサトウ」

ぼくの呼びかけにタナカ先生は優しい笑顔でこたえる。

「なんかみんな変なんです」

「いったいどうした」

「なんか、みんなよそよそしい。大変そうにしているから手伝おうとするんですけど、みんな断るんです」

「よそよそしいか。サトウ、むずかしい言葉知っているな」

そう言って先生は笑った。

「心当たりはまったくないの？」

ないです。ぼくがそう言うと先生は驚いたようだった。

「うーん。いずれわかるよ」

「え、どういうことですか？」

先生は何か知っているらしい。だけど、いくらぼくが質問しても何も話してくれない。

「世の中には知らないほうがいいこともあるんだよ」

最後には諭すようにそう言った。先生はそれ以上のことは話さなかった。

結局その日はずっとそんな感じで、みんなの様子はおかしいままだった。

なんだかぼくを避けている。

いまも、帰りの会が終わったらぼく以外のみんなはいそいでどこかへ消えてしまった。

いったい何だったんだろう。

しょんぼりして帰ろうとしたところだった。

あわてた様子でヨシダくんが教室に戻ってきた。

そしてぼくの手を引いた。

「ちょっと来て」

その強い力にぼくはおどろいて、何も言わないままヨシダくんの後をついていく。

ついた先は視聴覚室だった。

「中に入って」

言われたまま中に入る。

入った瞬間、パパパパンと破裂音があった。

音にびっくりして目をつぶる。そこにみんなの声が聞こえた。

「お誕生日おめでとう！」

驚いて目を開けると、拍手しているみんなの姿が見えた。

視聴覚室は紙のテープで豪勢にデコレーションされていて、黒板には大きく

「サトウくんたんじょう日おめでとう」

と書かれていた。

そうだった。

そういえば、今日は誕生日だ。

「サトウくん、いつもみんなのこと助けてくれるでしょ。だからみんなお礼がしたくて」

スズキさんの手には大きな箱。

「はい。プレゼント」

箱から出てきたのは大きな大きな金メダルだった。

「私の家でみんなで作ったの。すごく重かった」

そう言って笑って、スズキさんは金メダルを首にかけてくれた。

サトウくんの特別な一日

<http://p.booklog.jp/book/41172>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41172>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41172>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.